王朔『看上去很美』について

杉野 元子

1、はじめに

王朔は99年3月に長編小説『看上去很美』（華芸出版社）を発表した。この小説は、王朔７年ぶりの小説であること、出版社が海賊版を防ぐために書名を伏せたまま書店からの予約を受け付けたことなどがマスコミで大きく取り上げられ、出版前にすでに20万冊もの予約が入った。そして出版後も海賊版防止のための斬新な工夫、すなわちCD-ROM版『王朔自選集』一枚を本の付録としたこと、前表紙を複雑に折り込みCD-ROMを入れるためのポケットを作ったこと、CD-ROM込みで23元という低価格に押さえたことなどが話題となり、99年6月末までの間に35万冊の売り上げを記録した(1)。しかし作品自体の評判はあまり芳しくなく、「期待はずれ」という声が多く寄せられた。たとえば王朔の本を編集するなど王朔と近しい間柄にある白燁でさえも、この小説はまあまあの出来であり、王朔作品の中では珍しく読者を引きつける魅力に欠けるというやや辛口の評価を下している(2)。たしかに『看上去很美』はそれまでの王朔作品とは異なり、叙述が平板かつ冗漫なため、筆者も読み終えるのに骨が折れた。しかし王朔の幼少年時代の生活を細部に亘って丁寧に描いているこの小説は、「社会主義新人」(3)王朔の人間形成のプロセス及び王朔文学の原風景を探るための極めて重要なテキストとなっている。また49年以降北京に移ってきた共産党、政府、軍などの関係者は、省庁レベルの機関ごとにそれぞれ広大な敷地を高い壁で囲んだ「大院」で暮らすようになり、そこを舞台として新しい北京人による新しい文化が創出されるようになったが(4)、この小説は、その数ある「大院」の中でも解放軍兵士に門を守られ、内側の様子を窺い知ることが難しい「軍隊大院」に関する興味深い情報を提供している。そしてさらに『看上去很美』には続編が予定されており(5)、今後の王朔文学はこの小説の延長線上に進んでいくものと思われるので、その意味においてもこの作品は重要である。

そこで本稿ではまず『看上去很美』誕生以前の王朔の文学的足取りを簡単に振り返り、次に『看上去很美』の作品分析をおこない、最後に『看上去很美』出版後の現在の王朔について紹介する。

2、『看上去很美』以前の王朔

王朔の処女作は短編『等待』（78年）であるが、文壇への本格的デビューを飾ったのは中

編『空中小姐』(84年) である。そしてその後堰を切ったように旺盛な創作活動を続け、78年から92年までに書いた小説は合計31篇、160万字に及ぶ。

王朔は92年のインタビューの中で創作の歩みを三段階に分けて語っている。第一段階は『空中小姐』、『浮出海面』(85年)、『一半是火焔一半是海水』(86年)などの情に訴える「言情」小説を書いた時期である。第二段階は『玩主』(87年)、『一点正経没有』(89年)、『千万別把我当人』(89年)などのからかいや言葉遊びや流行語をふんだんに取り入れた「調侃」小説を書いた時期である。そして第三段階は再び「言情」路線に戻り、『我是你爸爸』(91年)、『無人喝采』(91年)、『動物凶猛』(92年)、『許爺』(92年)などを書いた時期である(6)。

王朔の文学的足取りを振り返る際、見逃すことができないのはメディアとの関係である。王朔は小説を書く一方で、テレビ・映画の仕事にも進出し、88年には王朔脚本の映画が4つも封切られ、「王朔年」と称された。また89年1月にはテレビ・映画の脚本を請け負う文芸プロダクション「海馬影視創作中心」を設立し、理事長に就任する(7)。王朔自身が「私の88年以降の創作はテレビ・映画の影響を受けていないものはほとんどない」、「私の友人の多くは監督や俳優で、彼らは朝から晩まで私に物語ってくれた。金銭に誘惑されて、これらの物語を文字にして彼らの撮影に用立てた」(8)と書いているように、88年を契機に王朔は映像メディアとの関係を深めていく。例えば『千万別把我当人』は、張芸謀、顧長衛などとの話し合いの中から生まれてきたし、『我是你爸爸』は馮小剛がテレビドラマ用に温めていた構想を、『許爺』(92年) は姜文の映画用の構想を基にして書かれた(9)。

しかし王朔は映像メディアとの相乗効果によって人気作家となったものの、92年に突然小説の筆を置くことを決心する。王朔は92年初夏のある日の自分を振り返って、次のように書いている。

> 突如、これまで意のままに熟練した筆を揮っていたあの種の小説に興味を失った。意のままに書いているうちに本質的なものを失い、熟練していく中で肝心なものを逃してしまったと感じた(10)。

王朔は映像メディアを利用することによって作家としての名声を確立したものの、次第に自分が映像メディアに毒され、本来の自分を見失っていることに気付いたのである。そこで王朔は「私はもう私と関係のないものを書かない。もう金、信仰、読者、社会的需要のために書くことはしない。もしまた書くとしたら、私の心の中の唯一の読者—私自身のためだけに書く」(11)と決心し、小説執筆を休止した。

さて小説を書かなくなった王朔はテレビドラマ脚本の仕事に本腰を入れるようになるが、その理由は次のようなことからだった。一般に王朔の小説は多くの読者に支持・愛好され

ていると見なされていたが、実際の本の売れ行きはいつも数万冊に低迷していた。王朔は80年代初めに広東へ行きブローカーの仕事をしたときの経験から、流通というのが商品の生産・販売において重要な位置を占めることを実感していたため、自分の本が売れ行き不振なのも流通領域に問題があると考え、自分で販路を開拓することを決心する。92年当時はテレビドラマ全盛期だった。王朔は自己宣伝の目的でドラマ制作の仕事に関わるが、その目論見通りにマスコミは王朔の存在に注目し、92年には200人以上の記者からの取材を受け、全国津々浦々の新聞に王朔関連の記事が大量に掲載されるようになった。そして王朔というブランド名が消費者の脳裡に定着したことにより、どの本も10万冊の大台を越える売れ行きを示すようになるのである(12)。単に書くだけでなく、自己をメディアに積極的に晒して知名度を上げ、自作の売り込みを図るというまったく新しいタイプの小説家の姿をここに見ることができる。

さてこのように王朔は92年以降、テレビドラマの仕事に本格的に乗り出すのだが、高視聴率を狙って心血を注いだテレビドラマ『愛你没商量』(92年)は王朔自身も認める失敗作となり、また95年には脚本家養成及び小説のテレビ化・映画化の権利獲得交渉を主な仕事内容とする「時事公司」を設立するものの順調にいかず、頓挫する(13)。張新波が「王朔はすばらしいアイデアマンであり、比較的多くのプロデュースにも参画している」が「彼はよい社長ではない」とし、「物事にじっくりと取り組むことができない、とりわけ財務関係の仕事に対する辛抱強さに欠けている」という欠点を指摘しているように(14)、王朔は会社社長の器ではなかったのである。

王朔はその後97年１月から10月まで渡米し、帰国直後から『看上去很美』の執筆に着手、99年3月に再び小説家として人々の前に姿を現す。

３、『看上去很美』

王朔は『看上去很美』自序の中で、「最初の短編小説を構想したときに、この小説のことも構想していた」(15)と書いているように、王朔はこの小説の題材を長年大切に温めてきたのだが、97年10月に小説以外の道がすべて行き詰まったのを機にこの題材に着手し、98年10月に完成させた(16)。

『看上去很美』は王朔の実体験を下敷きにして書かれた自伝的色彩の濃い小説であり、王朔の分身と見られる主人公方槍槍の３歳から８歳までの成長過程が描かれている。時代背景は61年から66年までである。全部で20章あるが、第12章までが復興路の「軍隊大院」の中に設けられた保育院時代、第13章以降が「軍隊大院」の近くにある翠微小学校時代のことが描かれている。

従来の王朔の小説はいまの北京に住む若者の生態を描いたものが多く、若者の話し言葉

を巧みに取り入れた会話を多用させてテンポよく展開するストーリーが読者を魅了した。一方この新作では、60年代前半の北京の「大院」に暮らす幼少年の日常が細かい心理描写を交えながら丁寧な筆致で描かれているものの、方槍槍が保育院の先生を妖怪だと信じ込んだり、「王八拳」という出鱈目な拳法で遊んだり、バッジを誤飲し浣腸されたり、といったたわいもないエピソードが羅列されていて読者を退屈させる。しかしこの作品は90年前後に文壇の寵児として一大旋風を巻き起こした王朔という文学者のルーツを探るのに不可欠のテキストとなっているし、新中国成立後に新しく北京で形成された「大院文化」の実態と本質を明らかにしようとした野心作でもある。王朔は『王朔自選集』自序の中で次のように書いている。

> 常識のある人はみんな知っているが、49年以降新生した中央政権が大勢の人を伴って来てから、北京はニューヨークのような移民都市へと変わった。（中略）古くからの北平の住民の中には解放前から革命に参加したものが多くなかったので、中央には人（北京出身の人——引用者注）がいなかった。（中略）私は小さいころ復興門外に住んでいたが、あのあたりの広い地域は「新北京」と呼ばれていた。私の印象では全国各省の人がすべて揃っていて、朝鮮人、ベトナム人さえもいたが、老北京人の一家はいなかった。（中略）私は自分と老舎の時代の北京人とが何らかのつながりをもっているとは思わない。あの満族の色彩を帯びた古都の習俗や文化伝統は私のところで根元から斬られてしまった。私の心情、やり方、言語習慣も含めた思考方式はむしろ新文化の影響をより強く受けているといった方がいい。この文化をさしあたっては「革命文化」と呼んでおこう(17)。

王朔は、城内の「旧北京」に網の目状に張り巡らされている「胡同」を舞台に「老北京人（生粋の北京人）」によって育まれた「伝統文化」と城外の「新北京」の土地を高い塀で大きく囲い込んだ「大院」を舞台に49年以降移り住んできた「新北京人」によって新たに形成された「革命文化」という二項対立の図式をはっきりと頭の中に描いている。古都北京の伝統文化を独自のスタイルで描き「京味小説」の最高峰を極めた老舎は、晩年自伝的小説『正紅旗下』を執筆して自己のルーツを明らかにしようとしたが、新北京の革命文化の下で育った若者の生態を斬新な手法で描いて新しい「京味小説」を創出した王朔も、自伝的小説『看上去很美』を書くことによって自分探しをおこなおうとしたのである。

では『看上去很美』に描かれている60年代前半の「軍隊大院」の日常とは如何なるものであろうか。その主な特徴を以下に挙げる。

①閉鎖的社会

方槍槍の一家が暮らす復興路29号の「軍隊大院」は、いくつかの軍関係の大院が集中している「大院文化割拠地区」の一角にあり、構内にはオフィスビル、住宅、運動場、講堂、保育院、浴場、クリニック、食堂、食料保存庫などの設備が整っている。住宅は階級や身分によって住み分けがなされていて、紅軍出身の制服組は38楼のアパートに、八路軍出身の制服組は42楼と23楼のアパートに、運転手、炊事係などの非制服組は平屋の「貧民窟」に住んでいる。42楼に住む方槍槍は平屋の家を「老百姓家」と呼び、そこに住み保育院へも行かない子どもたちを「老百姓の子ども」と呼んでいた。方槍槍は幼い頃からエリート意識を植え付けられていたのである。

②集団生活

方槍槍は保育院にずっと預けられていて、自宅へは二週間に一度しか戻らなかった。また自宅に面倒をみてくれる人がいなかったため、小学校入学後も保育院で暮らし、そこから学校へ通った。従って方槍槍は、「自分の父母を愛していないし、家庭観念も希薄で、集団生活に慣れ親しんでいた」。方槍槍の幼少期は同年輩の仲間との共同生活に明け暮れ、親子のスキンシップが極度に不足していた。

③革命文化

「大院」には全国各地から移り住んできた人が住んでいたので、例えば各家庭の食べ物の好みはバラバラで、北京の伝統的飲み物「豆汁」を愛飲している家は一軒もなかった。このような多元的文化を束ねていたのが革命文化である。保育院児さえもが日常会話のなかに「毛主席」、「天安門」、「無産階級」、「万々歳」などの革命的単語を交えていた。

④子どもたちの楽園

60年代初めからすでに「大人はみんな忙しそうにしていた」のだが、文革開始後は、五七幹部学校に行かされるなどして大院構内から大人の姿が減り、子どもはますます自由を謳歌するようになる。方槍槍が家庭に配布された無料会食券をもって宴会に出席したところ、主宰者側の人間だけが大人で、客はみんな子どもたちだったという奇妙で滑稽な場面も描かれている。大人たちが政治運動に翻弄されている時、子どもたちは大人の干渉を逃れて自由にのびのびと個性を発展させたのである。

楊東平は王朔文学の言語的特徴として共産党の政治概念や政治用語、文革中の専門用語を一ひねりして使うことを挙げ、登場人物の生活方式の特徴として仕事、勉強、婚姻、家庭、道徳を軽蔑し、自分の遊び仲間の世界に帰属していることを指摘しているが(18)、『看上去很美』はこのような王朔文学の生んだ「大院文化」の実態を明らかにしていて興味が引かれる。

いま北京では政府の持ち家購入奨励政策の波に乗って、高層マンションが続々と建設されている。「胡同」の伝統的平屋住宅は次々に取り壊され、そこに住んでいた人々は補償金を手にして郊外のマンションに移り住んでいる。また「大院」の中低層賃貸しアパートの住人の中にも、「大院」の外に建てられた広くてきれいな新築マンションを購入し引っ越していく人が増えている。「胡同文化」は老舎という、「大院文化」は王朔という絶妙の語り手を得たことにより、文学世界に鮮明な像を結ぶことができたが、「胡同文化」と「大院文化」という二極対立の図式が崩れ、新しい様相を呈しつつある21世紀の北京は王朔に次ぐ新しい世代の語り手の誕生を待望しているのである。

王朔は『看上去很美』の続作として、方槍槍が小学校を卒業するまでの成長過程を描く作品を予定している。そしてこの方槍槍を主人公とする小説シリーズは、70年代中期の中学時代の体験を下地にして書かれた『動物凶猛』や高校卒業後都市遊民として職業を転々とした王朔の姿が投影されている人物方言が登場する『一点正経没有』、『玩的就是心跳』などの作品世界へと繋がっていく。しかし「大院文化」というのが存在感を薄めつつある現在、その原点に立ち返り、語り伝えようとする王朔に対して、どれほど読者が関心を寄せるかは疑問である。

4、『看上去很美』以後の王朔

王朔は99年3月に『看上去很美』を掲げて小説家として再出発をしたが、評価は芳しくなく、以前のような「王朔熱」が巻き起こることはなかった。しかし王朔は99年11月1日付「中国青年報」に「我看金庸」という一文を発表したのを皮切りに、「我看王朔」、「我看老舎」、「我看魯迅」などの評論を次々と執筆する。自分自身及び文壇の大御所と見なされている作家に対して辛辣で批判を浴びせたこれら一連の評論は大きな話題となり、マスコミからの取材も殺到した。そして2000年1月には王朔の初めての評論集『無知者無畏』（春風文芸出版社、初刷り20万冊）が出版された。王朔の評論は学者の文体とは異なり、具体例を挙げながら堅苦しくない言葉で書かれているので、文芸評論の間口を広げ、一般読者の興味と関心を呼び起こすのに大いに貢献したが、一つの作品さえも全部読み終わらないまま批評を加えたり（「我看金庸」）、映画を見たときの印象をもとにして原作の登場人物が概念化されていると指摘したり（「我看魯迅」）と、やや乱暴で的外れな批評となっている。しかしたとえば「我看金庸」の発表後、王朔ファンと金庸ファンがインターネット上で熱い議論を戦わせたりするなど、王朔の刺激的な評論は新聞、雑誌、インターネットなどで様々な反響を呼び起こし、2000年5月にはそれらの反響を集めた『痞子英雄——王朔再批判』（中華工商聯合出版社）が出版された。90年代の王朔はテレビ・映画を巧みに利用して、小説家としての知名度を高めるのに成功したが、いまの王朔は評論活動によってマスコミの注

目を引きつけながら、『看上去很美』の続編への下準備をしているのかもしれない。王朔とは巨大なメディアに対して、食うか食われるかの激しい闘いを挑み続ける作家なのである。

【注】

(1)趙晋華「1999上半年文学書情」(「中華読書報」99年7月28日)によると、目下のところ海賊版は正規版にほぼ匹敵するくらいの数量が発行されているので、『看上去很美』の実際の発行部数は、海賊版も合わせれば50万冊以上と推定されている。

(2)白燁「在似與不似中演出」(『光明書評』99年第3期、99年8月14日)

(3)王朔は「我的最大弱点:愛自己——而且自己知道」(『無知者無畏』、春風文芸出版社、2000年1月、p171、原載不明)の中で、代表作『玩主』に登場するような若者の一群は一般にはゴロツキと呼ばれているが、自分は「社会主義新人」と名付けたいといっている。

(4)楊東平は『城市季風』(東方出版社、94年10月、p8)で、現在の北京は人口の約四分の三が49年以降移り住んできた新北京人とその子孫で占められ、78年以降の重要な思想や文化や理論のほとんどすべてが、彼らの住んでいる「大院」から発信されていると指摘している。

(5)王朔「我的最大弱点:愛自己——而且自己知道」(p167)によると、王朔は『看上去很美』をこれから書く予定でいる大長編の第一章と見なしている。

(6)王朔等『我是王朔』(国際文化出版公司、92年6月、p29、36)

(7)「海馬影視創作中心」は当初所属作家が20名だったが、92年の時点では30数名にまで増えた。しかしその後の動向は不明。

(8)王朔「身後一片廃墟」(『無知者無畏』、p103、原載不明)。なお王朔の文章は、斜に構えて本音や事実をはぐらかしたものが多いが、本稿においては前後の文脈或いは他の王朔の文章との比較から信憑性が高いと判断した部分を引用した。

(9)王朔「我看王朔」(『無知者無畏』 p 53-54、原載不明)

(10)王朔「自序——現在就開始回憶」(『看上去很美』、p1-2)

(11) (8)と同じ。p104

(12)王朔「我看大衆文化港台文化及其他」(『無知者無畏』 p 18、原載「天涯」2000年第2期)

(13) (12)と同じ。p25

(14)張新波「王朔:整天胡説八道」(『痞子英雄——王朔再批判』、中華工商聯合出版社、2000年5月、p57、原載不明)

(15) (10)と同じ。p6

(16) (3)と同じ。p166

(17)王朔「不是我一個跳蚤在跳——『王朔自選集』自序」(『無知者無畏』、p110-111)

(18) (4)と同じ。p541、547